双葉通信【第 213 回】（被災地を行く№16）“ふくしまの切り捨ては許さない”

20240610　上田　勉

（てんでんこ）被災馬物語：１　　■肩に被曝の烙印、「風化する震災」伝える被災馬

鹿児島県北部にある霧島山麓の標高 700 メートルの一帯に、青々とした草原が広がる。５月上旬、牧場では馬たちが草をはんだり、寝転んだりして、思い思いに過ごしていた。

厩舎（きゅうしゃ）を案内する牧場スタッフの住広憲治（39）が、黒鹿毛の１頭の前で立ち止まった。左肩に大きさ 10 センチ四方ほどの、牛の顔と角を模したおうし座のマークの烙印（らくいん）が押されている。住広は「これは被災した証しです」と説明した。

名前はコッチャン。17 歳の元競走馬の牝馬（ひんば）で、地方競馬では 14 戦２勝と振るわなかった。ただ、今は水飲み場を占領し、気に入った牡馬（ぼば）以外は寄せつけない。「約 150 頭いる牧場で一番の強気な性格。『女帝』と呼ばれています」と住広は笑う。

13 年前、コッチャンは泥水を浴び、やせ細っていた。飼育されていた福島県沿岸部の南相馬市は東日本大震災で震度６弱の揺れや津波に襲われ、東京電力福島第一原発事故で、20 キロ圏内に避難指示が出た。

地域では、騎馬行列や甲冑（かっちゅう）競馬が有名で、国の重要無形民俗文化財に指定される「相馬野馬追（のまおい）」が行われ、家の軒先や地域内の小屋で馬を飼う人が多い。震災で馬たちも被災した。食用を含めた約 400 頭のうち、少なくとも約２割が死んだり、けがを負ったりしたとされる。コッチャンもその一頭だった。

震災から３日後、千葉県香取市のＮＰＯ法人「引退馬協会」代表理事の沼田恭子（71）の携帯が鳴った。見知らぬ番号の主は、南相馬市の男性だった。

「突然すみません。震災に遭った馬が８頭いるんです。もらってもらえないでしょうか」

「えぇ！８頭も！」沼田は思わず聞き返した。男性の声は切羽詰まり、馬の世話も十分出来ない窮状を訴えた。沼田は引受先を探したり、他の被災した馬の情報収集をウェブ上で呼びかけたりしたが、よく事情がつかめなかった。約１カ月後、自分の目で確かめようと、仲間と防護服を着て、原発から 20 キロ圏内にある南相馬市の肥育場に足を踏み入れた。倒れて息絶えたり、脚に深い傷を負ったりした馬が視界に入ると、言葉を失った。

その中で、あばら骨が浮かび、うつろな様子でたたずむ１頭と目が合った。コッチャンだった。「この子たちを救いたい」。沼田は一部を引き取り、原発から離れた牧場へ運んだ。

約２週間後、国は原発から 20 キロ圏内を「警戒区域」に設定し、人の立ち入りを厳しく規制した。同じ頃、区域内の家畜が殺処分されるという情報が出回った。

当時の市長、桜井勝延（68）は「野馬追を途絶えさせるわけにはいかない」と思った。農林水産省や文化庁にかけ合い、「せめて馬だけでも救って」と訴えた。桜井は元酪農家。牛たちが飢える中、苦渋の判断だった。国は馬を区域外に出すことを認め、コッチャンを含む約 30 頭が市内の「馬の避難所」に移動した。馬たちが「避難所」から出たのは翌 2012 年暮れ。飼い主の元へ戻っていった。その際、原発事故で被曝（ひばく）した馬が食用で出回らないように、他の家畜と同様におうし座マークの凍結烙印を国の指示で押された。（酒本

友紀子)」(「朝日新聞デジタル」2024 年 5 月 28 日)

【相馬野馬追のお迎え（浪江駅前)】(2024 年 5 月 26 日撮影)

【小さい時から馬乗りに（浪江駅前)】(2024 年 5 月 26 日撮影)